

心奥探訪

「趣味を仕事に変えた男が選んだ「自分の好き」」

彼が療養したと聞いたのは3ヶ月ほど前のことだ。

一時は片耳しか聞こえなくなるほどに心に余裕を無くした。

そんな彼が笑顔を取り戻し、告げた言葉。

「飲食店を出そうと思ってまして」

長年「食」に関わる仕事をしてきた彼にとって飲食店を営むことが楽なものではない事は嫌というほど見てきたはずだ。

そんな彼がなぜ店を構える決断をしたのか。

そこには好きなものに対する強いこだわりと熱い想いが込められていた。

未熟児で生まれた彼は周りの大人たちにたくさん食べるようにと育てられた。たくさん食べるとみんなが喜ぶ。

彼にとって食べることは空腹を満たす行為だけでなく

周りを笑顔にすることもあった。

中でもお気に入りだったのが、母親の作る手作りパン。

小学生の文集には「パン屋さんになって、両親に家をプレゼントする」と書くほどだったという。

母親の手伝いをするうちに彼が「料理」に興味を抱いたのは必然だったのかもしれない。

小学6年生の頃には自分の作ったチャーハンや炒め物が食卓に並んでいた。

「食べる」幸せ、「作る」楽しさ、「提供する」喜び

現在の彼を形作る大切な要素。

今に繋がる感覚を覚えたのはこの頃だと語る。

そんな彼が本格的に料理にのめり込んだのは大学生の頃だった。

「趣味なんなん？」

友人からの何気ない一言に彼は「料理」と答えた。

趣味と言えるものが何もないと感じた中で答えた。好きなこと。

料理と答えたからには何か極めたい。

「自分ができる最大限の中でやってみよう。」

パスタ屋でバイトしていたことも重なり、彼のパスタ作りがスタートした。

初めはソースから始まり、製麺機でそれに合う麺を作る。

太い麺か細い麺か、生麺か乾麺か。

色んなパスタ屋を食べ比べながら、再現したい味を見つけてはネットにあるレシピと

自分の舌を頼りに研究し続けた。

そうして完成したのがボロネーゼ。

1年半かけた一品は今でもアップデートを重ね、彼の代表作になっている。

大学3回生になるとバイト先を寿司屋に変えた。

授業中消しゴムで握りの練習をするくらい早く握ってみたかったという。

魚のおろし方や盛り付け方など、パスタ屋とはまた違う技術を覚えた。

元々英語教師を目指して教職課程に進んでいた彼だったが、社会経験がない自分が子供たちに何を伝えられるのか？を悩んだという。

英語が好き、子供が好き、教えたり伝えたりすることが好き。

そうして選んだ大学だったが、一度社会に出るため就職活動を始めた。

色んな選択肢の中から冷凍食品を飲食店に提案、販売する会社へ就職。

この時の選択肢の中に「飲食店」はまだ入っていない。

むしろバイト経験から店を持つのはしんどいと感じていたという。

社会人になり外食が増えたことで、料理が提供される空間、店の持つ雰囲気にも

彼の興味は広がっていった。

『自分は何を求めてこの店に行ったのか？』

彼にとって「料理」とは何なのか？その片鱗が見えた気がする。

一方で家で作る料理のレパートリーはお店で美味しかったものの再現だけでなく、お酒に合う一品も増えていった。

そうして社会人になって10年以上経ったある日。

片耳に異常が起こった。

知らず知らず溜め込んでいたものがあつたのかもしれない。
結果的に彼は療養を余儀なくされた。

しかしこの経験こそが彼を飲食店へと導く大きなきっかけであつたことは間違いない。

それまで「料理」は彼にとって究極の自己満足だつた。

趣味であるからこそ、とことんこだわる事が出来るもの。

仕事とは違う。

そんな彼を変えたもう一つの大きなきっかけがパートナーの存在だ。

「好きなことで仕事出来たらいいね。」

そんな言葉をずっと彼にかけた。

ある日彼女が友人を招いた時に彼が料理を振る舞う機会が訪れた。

彼女が意図したのか、無意識だつたのか。

図らずも彼女が提供したその機会が彼の意識を大きく変えた。

幼い頃、自分の作る料理を提供して喜んでくれた両親。

美味しいと言ってくれた身近な人以外の存在。

「提供する」喜びを思い出した瞬間だった。

布団に入り、もしお店を出すならどんなのがいいだろう？

メニューは何をおこう？

お店の名前は何かいいかな？

自分の中でずっと蓋をしていたものが溢れ出て止まらなかったと当時を語る。

「単純にワクワクしたらいいや」

これまで仕事と趣味の違いや飲食店の大変さ、色んなことが頭の中でぐるぐるしていたのだろう。シンプルにそっちに振れた感覚だという。

加えて仕事に対してのイメージも変化した。

これまでは期日や時間に追われる歯車のようなイメージを持っていたという。

けれど今はワクワクする気持ちを燃料にしたエンジンになり夢や目標を追う側になった。

そんな彼がこれから作り出す空間はどんなものだろうか。

何を求める人が彼の店に来るのだろうか？

「それは私に会いにです。」

屈託の無い笑顔で彼は答えた。

きつとその店の一番の看板メニューは彼自身であり、その人柄に触れて元気になって帰っていく。

彼にとって料理とは自分を一番輝かせてくれるサポーターであり、周りを笑顔にしてあげられるもの。

そんな相棒のような存在ではないだろうか。

夢に向かって踏み出した一歩。

この先彼はどんな未来を提供してくれるのだろうか。

きつとたくさんの笑顔をふんだんに使った最高の一品に違いない。